



「知ってる」「知らない」

校長 永井 有司

向春の候、ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。日頃から本校の教育活動に御理解・御協力をいただき、心より感謝申し上げます。

仕事の合間に、教室に行って授業を参観するのですが、子どもたちの発言の中で多いものに、「知ってる!」「知らない(わからない)」というものがあります。低学年の方が「知ってる!」という発言が多い傾向があります。私が学級担任をしていた頃も同様でした。担任の話を遮って「知ってる!」と発言する子には、「あ、そう。それなら、〇〇さんには先生に代わってこの事についてお話をしてもら



= 谷地坊主 =

います。せつかくだから、前に出てきてお話をしてくれる?」と声を掛けます。すると、顔を真っ赤にして「・・・」となる子が多かったです。少々意地の悪い声掛けだったかも知れませんが、低学年の「知ってる!」は単に「聞いたことがある」程度の事が殆どです。高学年になるにつれて、「知ってる!」発言が少なくなるのは、成長するにつれて自分自身の事が少しずつ分かってくるからかも知れません。それにしても「知ってる!」と「知らない」はどちらの方がよいのでしょうか。

ある先生(N先生)からこんな話を聞いたことがあります。北海道で生活をしていた時のこと、教え子の家族と一緒に延々と続く釧路湿原を車で疾走していました。美しい景色に見とれながら運転をしていると、教え子が「N先生、見て! 谷地坊主(やちぼうず)があるよ」と話しかけてきたのです。『谷地坊主』とはスゲ科の植物で、地下茎が盛んなために冬に凍って株ごと盛り上がり、数10年で大きな塊に成長していくのです。お坊さんの頭に似ているところからその名がついたそうです。

わたしも、このお話を聞く前まで、谷内坊主なるものは知りませんでした。5月に、6年生の修学旅行で戦場ヶ原のハイキングをした時に、たくさんの谷内坊主がありました。知らなければスルーしていたと思います。当時は、N先生も『谷地坊主』なるものを知らなかったのですが、知らないのも恥ずかしいと思い生返事をしてしまったそうです。すると、その子は「N先生、知らないんでしょ」と鋭く畳みかけてきたのです。N先生は観念して「本当は知らないんだよ。ごめんね」と素直に謝ったそうです。30年近く経った今でもN先生とその教え子との交流は続いているようですが、N先生は「谷地坊主を見ると、この恥ずかしい思い出が心に浮かんで来て戒めになっています」とおっしゃっていました。

物事は、知らないよりも知っている方がよいに決まっています。けれども、人は「知っている」と思ったところから成長はしなくなるともいわれます。物事は、学べば学ぶ程視界が開けてくるために、自分が何を知っていて何を知らないかが分かってくるといいます。「自分は何も知らない、ということを知っている」という境地になるのは難しいかも知れませんが、何歳になっても、またどんなに深く学んでも「学ぶ姿勢(気持ち)」を保ち続けたいと思います。また、子どもたちにも「知っている!」で終わりにするのではなく、文科省でも「主体的・対話的で深い学び」を推奨しているように、深く学ぶことの大切さを教えていきたいと思ひます。